



びっさいえほん館での読み聞かせの時間に、ボランティアのお母さんが「かさじぞう」の紙芝居を読んで下さいました。非情さとあたたかさをお話せもつ雪というものを基調にしたお話に、雪が降った時のようなしっとりとした空気に包まれました。

年越しの準備ができないほど貧乏なおじいさんとおばあさんが織りなす関係、笠はひとつも売れなかったけど善良さが報われる話は読む人の心をあたたかくしてくれます。

ところで、それを聞いた若い先生が疑問を抱きました。何でこの人たちは新年を迎えることにこんなにいっしょけんめいになるのだろう。

たしかに、私たちも大掃除をしたりおせち作ったり年賀状書いたり、新しい年を迎えるために準備はするし、一つの節目として新しい年を意識し、仕切り直しをしたり、こちぞう食べてお酒飲んで楽しく年をむかえたり、挨拶に行ったり祝いあったりしてはいます。

でも、「もういっしょくたのお正月」というあのドキドキ感を、今でもお持ちですか。年を経ることに薄れていってはいませんか。お年玉をもらえらる子どもの感慨？ いえいえ、年齢ではなく、時代的な要因が強いと思われまふ。

読みかかせをして下さったお母さんが、その紙芝居にあった解説を伝えてくれました。年越しとかお正月とかの意味は、自分たちが楽しむ事にあるのではなへ、へんが、けるところにある、とこのお母さん。

おじいさんが「商品」の笠を一つも売ることができず、地蔵さんにかぶせて帰ってきてしまったという「役立たず」のような行いを、おばあさんは怒るどころか「えかった、えかった」と受け入れる、あの心境に感動するのですが、おばあさんは人としてのやさしさよりも、もっと少く深いところからその心持ちを汲んできているように思われます。貧乏で「かわいさう」と「かきまわさう」ができないからこそ、せめ

段ボールを駆使した手作り紙芝居台で
読みかかせするボランティアさん



て笠でもというのが、わずかでも年越しのつとめを果たすことになるから「えかった」ということなのだ、と。

結局、年越しという行事は神仏との関わりを基軸としているということなのです。

哲学者のニイチエは十九世紀末に「神は死んだ」と言いました。人間社会が究極的な価値を喪失し、絶対的なものや神聖なものへの感受性を失ったということです。そして、人間は人間社会に閉じこもって出口を失い、全ては人間のためとなり、その人間自体が何のためなのかわからなくなっているという現状を見れば、ニイチエの見抜いたとおり歴史は進んでいると言わざるを得ません。

現実におけるさまざまな出来事をその底から規定している精神史の根本動向が、年越しが平板化しているところにも作用しているように思われます。つまり、神仏という内容を失うと、正月は空洞化し、形骸化するということです。それが、私たちが近年経験している「正月が正月らしくない」という感じの出所だということになります。

今年中学校の運動会でびっくりしたことがあります。はちまきに「神」と書いてあるのです。今や若い人が「神」を形容詞に使うようです。物事の度合いがはなはだしいことを「超」といったりします。

そして形容詞はエスカレートするものです。「すごい」は今普通によく使いますが、明治のころの小説では「凄じ」「は」「ぞつとするほど恐ろしい」ところに「ユラユラ」で使われていました。そういうたぐいの形容詞として「神」。そして「神は死んだ」という事態が深まっている実例です。

大半の人が、ホッペをいえば「神も仏もあるものか」と思っているこの時代に、私たちはそこで失われているものをどうやって、何で、肩代わりするのでしょうか。

第九回

正月・ひま

お正月ってなんだっけ？

何年前、大晦日に宅配便を出しに行ったことがありました。一日に着くべしとしゃべりながら、はたと思いました。正月一日から仕事だなんて大変だよね。あれ？自分がそつさせてるんじゃないか！

そついえば、少し前までは初売りは一月二日だったのに、いつのまにか一月一日からしているお店も多くなりました。正月まで働いたら、一体いつ休むのだから。

かつてお正月は、年神(トシガミ)をむかえる祭だったようです。「年」と「神様」とのつながりがピンと来ないかもかもしれませんが、新しい年をむかえる時に神聖なものを感ずることができたというところでしょう。それにくわえて、昔は数え年といって、お正月にみな一歳をとったので、年があらたまることと自分が年を重ねることが一つに祝われたわけです。

昔の日本人は時間「質」の違いを感じて、「ハシとケ」というふうに言い表してきました。ハシとは、祭や儀礼などのおこなわれる特別な日、聖なるもの、非日常であり、ケは日常生活のこと。日常生活をいとなくエネルギーが枯れていくと「ケガレ」となることを、「ハシ」の行事などでまたそれを浄化したわけです。

ハシの日にはハシの日におどろかしい過ごしかたや演出があります。しめ縄は神の占める場所のことです。お節料理も年神に供え、神と



人が共に同じものを食べるというハシの日の食事という意味があります。神様をお迎えするのだから、労働という日常をいったん中断して、

閑(ひま)を過ごすことが、ハシの日におどろかしい人間のありかたでした。おせち料理も、台所に立たなくていいように保存食の意味もあり、閑を確保するための道立立てであったわけです。

みなさん、お正月はどのようにお過ごしでしたでしょうか。近年のお正月は、神聖というよりは全く、特別な日という感じが薄れていっているように思うのは私だけでしょうか。

せっかく仕事が終わるのに、だからといって家にいてもんびりできない。家族でめくくお家ごらんをまじり思っても、時間をもてあまして、結局入る中入行って買物して

いや、閑はつぎすすべきもの。つぎすす手段は消費。それほど、私たちは消費者の烙印が強く押された生き物になってしまいました。

お金をつかい、時間を使い、失っているのはもっと大きいもの。特別な日もいつもと変わらないことをして、結局、生活にメリハリがなく単調で「様々」なもので満足が足りるがために、潜行する空虚。

二十世紀を代表する宗教哲学者は言いました。現代社会を突き動かす魔の力を止めるものがあるとしたら、それは「本当の閑暇を人間が知ること以外にない」(西谷啓治)と。傾聴すべき言葉だと思われれます。

